

「警察官だって？」

父が何かの紙を見ながらそう言ったのを聞いて、私はすぐに立ち上がった。ホストファミリーの紙がついに到着したと思ったからである。七月中旬には来ると聞いていたので、首を長くして待っていたのだ。案の定、それはホストファミリーの情報を書かれた紙だった。警察官というのは、ホストファザーの職業だった。

私のホストファミリーは四人家族でペットはなし。ペットのいる家を期待していたので少し残念に感じたが、すぐにあるものが目に入った。

「子供が二人いる！」

そう、十歳の女の子と八歳の男の子がいると書かれていたのだ。これを見て、私はとても嬉しくなった。前から子供がいる家に行きたいと思っていたからだ。それからその他の情報を一気に読んだ。家族の趣味や両親の職業、そしてなんと「週末にはプールに行くから水着を持ってきて」とまで書いてあった。これにはさすがに驚きだった。ファミリーに関する様々な情報を一気に知り、早く行きたくてしょうがない気持ちになった。こうして私の英国語学研修は始まっていったのである。

七月三十日、いつもよりずっと早く家を出発した私は、大きなスーツケースを持って空港へ向かっていた。空港に着いたら出国の手続きをし、気付いたらもう雲の上だった。海外へ行くのは二回目だったが、親と離れて飛行機で十二時間もかかるところへ行くのは初めて。もちろん不安は大きかった。しかし、せっかく十二時間もかかる遠くの地へ行くのだから、一度日本の事は忘れて、イギリスの文化を存分に学んでしようと心に決めた。

イギリスに到着し、飛行機から降りて歩いている時、最初に目に飛び込んできたもの、それは Emergency Exit（非常口）の看板だった。以前、英語の授業でこの単語を習っていたため、実際に使われているところを見て、友達と興奮してしまった。同時に、日本語なら絶対に気にしない言葉であるのに、こんな小さいところですら英語で書いてあるのを見て、ついに日本語が通じない国へ来てしまったのだと感じた。又、人とぶつかりそうになった時、さらっと「Excuse me.」と言われた事にもいちいち驚いた。ちなみに私は、さらっと「すみません。」だの「ごめんなさい。」だのを言った後に、ここではそれは通じないのだと思い、英語でぼそぼそと言い直すというのを繰り返していた。そのため、この研修が終わるまでには、英語できちんと言えるようになりたいと密かに思った。

二日目、ロンドン観光を終えた後、これが時差ボケかと変な時間の眠気と戦いながら、チェルトナムに向かった。そして面会式が始まった。それまでは特に何も思っていなかったのに、いよいよホストファミリーに会えると思うと、期待と緊張が入り交じった気持ちだった。ホストファミリーの名前が呼ばれ、私とペアの子の名前が呼ばれ、前に出ていくと、ホストマザーと二人の子供たちがにこにこと迎えてくれた。とっさに「Nice to meet you.」と言い、慌ただしく握手をした。二人の子供たちはとても元気で、ホストマザーは優しくそうな人だった。こうして私のホームステイは始まった。

三日目から、午前は英語研修、午後は様々な名所を訪れるという流れが続いた。私のクラスの担当は、ニッキー先生。全ての授業が英語なので、ついていけるか不安だったが、ニッキーはとてもゆっくりはっきり話してくれた。それに、何といっても自由人だった。

他の先生達は、既定のルートを順番に周っている一方で、ニッキーはあちらこちらのお店に入ったり出たりしながら、そのお店の説明をしてくれたのだ。ニッキーの話はいつも愉快で面白かった。そのため、不安だった英語の授業は、いつの間にか日本語の授業よりずっと楽しいものになっていた。又、午後に行った場所で最も印象に残っているところは、グロスター大聖堂だ。いつも学校でキリスト教について学んでいるため、外国の聖堂はどのようなになっているのか興味深かったからだ。中に入ってみると、私は壁や天井一面に施された彫刻やステンドグラスに圧倒された。写真で見るとは大きく異なり、キリスト教の長い歴史や人々の思いがひしひしと伝わってくるような気がした。それ以上に感動したのが、中で演奏していたオーケストラである。私は音楽部に所属しているので、コンサートでキリスト教関連の曲を演奏することがある。その時、「教会の中で演奏していることをイメージして。」と指揮者から指示されるのだが、それがまさに目の前で行われているのだ。天井が高くてとても広いグロスター大聖堂の中で演奏されていた音楽は、物凄い迫力だった。私は、何もかも忘れてその音楽に聞き入ってしまうほど、夢中になっていた。このグロスター大聖堂以外にも、たくさんの名所を観光した。どこの場所にも、それぞれ特有の魅力があり、興味深いところばかりだった。

このような昼間のアクティビティの後は、家に帰りホストファミリーと夜の時間を一緒に過ごした。私はできるだけ自分の部屋にこもらないようにし、ファミリーとたくさん会話するよう意識した。私の英語はもちろん完璧ではないが、うまく伝えられないことはペアの子に助けてもらいながら色々な話をした。私達が何か質問すると、ファミリーは簡単な英語でゆっくりと答えてくれた。おかげで私達は会話することが楽しくなり、子供達とも両親とも多くのことを話した。学校の仕組みについて、子供達が通っている習い事のこと

と、ホストマザーが好きな場所、その日に訪れた名所について、二重の虹が見えたこと、好きな音楽のこと、など挙げていてはきりがない。又、おしゃべり以外にも、ホストマザーと一緒にチョコレートバナナカップケーキを作った日もあった。チョコレートを砕く時、ホストマザーが机の上に置いた板チョコを、棒で思いつきり叩いて割るのだと教えてくれた。実際にやってみると、とても音が大きく、まるで怒っているかのような状態になり、ホストマザーから「Are you angry?」と冗談で聞かれた。これには、私達もホストマザーも、大笑いだった。また別の日には、ホストマザーの友達の家に行った。その家にも晃華生がホームステイしており、イギリスの家で日本人と遊んでいるのは変な感じだったが、お庭で走ったり一緒に夕飯を食べたりして、楽しかった。放課後の時間はこんな風にして過ごした。

ここで、イギリスの食事について書きたいと思う。ホストファミリーの家では、驚くほどいろいろな種類の料理を作ってくれた。フイッシュアンドチップスやラザニア、イングリッシュブレックファーストなどの料理はもちろん、メキシコ料理まで出てきた。私のホストマザーは料理が得意だったからか、どれも本当に美味しかった。出発前、英語が話せるかどうかの不安もあったが、それと同じくらい食べ物に関する不安も多かった。なぜなら私は和食が大好きであり、こんなに長期間外国の食べ物を食べるのは初めてだったからである。しかし、ホストマザーが作ってくれる料理は、お昼のランチボックスも含めて、美味しいと感じるものばかりだった。一つ驚いたのは、色々なものに酢をつけて食べるということだ。酢を食べるのは日本特有なものだと思っていたので、海外にもあるということとは初めて知った。ただ、硬水は慣れるまで時間がかかった。もともと水を飲むのがあまり好きではなかったので、ましてや硬水をそのまま飲むのは少し抵抗があった。そのため、何を飲みたいか聞かれた時には、いつも紅茶をお願いしていた。ホストマザーが入れてく

れる紅茶は、温かみがあつて大好きだった。イギリスの食事は美味しくないと言われているが、そんなことは全くなく、むしろ和食と同じくらい美味しさを感じた。

六日目、この日は一日中ホストファミリーと過ごす日だった。前に聞いたら、プールに行くと言われたのでその準備をしていた。その時、子供たちの事を叱っていたホストマザーが泣き出してしまった。私達は驚いて静かに待っていたのだが、その後落ち着いたのか出発することになった。泣き止んだホストマザーに会った時、私は何も声をかけられなかった。ただ笑うことしか出来なかったのだ。本当は、「大丈夫？」や「落ち着いた？」といった慰めの言葉をかけたかった。しかし、このような状況で言う言葉など、教科書では習っていない。日本語まではできていたのに、それを伝えることが出来なかった。私はとても悔しかった。自分はテストの英語や教科書に出てくるような教科としての英語はできたとしても、本当に必要な言葉としての英語は全然できないということを感じた。教科としての英語と言葉としての英語は全く違う。今後英語を学ぶときは、教科としての英語を身に付けるのはもちろん、言葉としての英語も身に付けていこうと思った。この日はその後、小高い丘に別のファミリーと登り、昼食を食べ、プールに行った。丘はそれほど高くはなかったが頂上からは自分達の家がある地域を一望できるような丘だった。頂上からの景色はとても良く、気持ち良かった。一緒に丘を登ったファミリーにも晁華生がいた。皆で昼食を食べていた時、日本人の四人は、ずっと四人だけでおしゃべりしていた。ただ四人ともそれぞれの家の子供達と仲良くしたいという思いが少なからずあった。その時、私のホストファミリーの八歳の男の子、ユーエンがあやとりをもってやって来たのだ。あやとりを出来るのは、四人の中で私しかいなかったが、やっていくうちに楽しくなってきた。四人ともより仲を深めることができた。仲良くなりたいた

いう思いがあれば、あやとりができなくても、英語がスラスラ話せなくても、距離を縮められるのだと感じた。

八日目、この日は生徒代表がチェルトナムの市長を訪問するといふ予定が組まれていた。私はせっかくイギリスに行くのだし、政治や社会に関心があるので、生徒代表であいさつをする役目に立候補し、スピーチを準備していた。簡単に短い文章であったが、チェルトナムの市長さんにあいさつをすと思うと、とても緊張した。市長さんが少し話された後、いよいよ生徒からのあいさつになった。とても緊張していたのでその瞬間の事はあまり覚えていないが、私が話す英語を、一生懸命に聞いてくださっていた。私があいさつし終わった後、市長さんは私の英語を褒めてくださり、スピーチの中にあつた質問にも丁寧に答えて下さった。少しつまずいたところもあつたが、大きなミスはなく終わられたので、達成感を感じたと共に、立候補して良かったと思った。今考えても、イギリスの市長さんにあいさつするということは、とても貴重な経験だつたと思う。その日の午後は、選択制授業だつた。私は、一コマ目にドラマレッスンを選択していた。この授業では、様々なゲームを通して演劇について学んでいく。イギリスでは、自分を表現することに重点が置かれているため、普段からドラマの授業があるそうだ。最初は恥ずかしかったが、徐々に演じることが楽しくなつていった。日本人はよく会議などの場で自分の考えを積極的に発言しないとされるが、それも自己表現の一種であるため、日本でもドラマの授業を取り入れたら良いのにと感じた。

十二日目、この日もファミリーと一緒に終日過ごす日だつた。朝食後、私達は町のお店が多く立ち並ぶ所へショッピングに行った。ホストマザー、ユーウエン、そして私達の四人で行つたのだが、途

中でホストマザーの友達の家族に会い、そこにいた晃華生と合流した。結果、途中でわかれて、晃華生四人と私のホストマザーで買い物をした。一通りショッピングが終わった後、ホストマザーが彼女のお母さんの家、私達から見たらおばあちゃんのような存在の家に連れて行ってくれた。急に行くことになったのにも関わらず、おばあちゃんは快く迎え入れてくれた。その家は、長く住んでいると言っていたが、そうは思えないほど綺麗で、時がゆっくりと流れているような家だった。おばあちゃんは私たちに紅茶を入れてくれて、お菓子まで出してくれた。私達は、幸せな気持ちで胸がいっぱいだった。チェルトナムに住んでいる人々は、みんな心にゆとりを持っていると思う。町で買い物をした時、私がかまくコインを出せなくて時間がかかって、店員さんは待っていてくれた。車に乗っていても、我先にといい運転の仕方をする人はいなかった。他にもこの語学研修中に感じたチェルトナム市民の優しさはたくさんある。これこそが、東京の街と大きく違うところだと感じた。東京はいつもせせこましいような気がした。このようなゆとりがチェルトナムの街を花や緑で美しくしているのではと考えた。

この日は帰宅後、ユーウエンと十歳の女の子、エレナと一緒にタレントショーで踊る、ダンスの練習を始めた。しかし、何の曲で踊るのか決める時に、なかなか意見がまとまらず、エレナとユーウエンで喧嘩になってしまった。その原因は、私達にあった。どんな曲が適しているのか、きちんと伝えていなかったのだ。伝える方がいいよねとペアの子と話していたのだが、英語に訳しにくかったため、伝えていなかったのである。幸い、二人は仲直りして無事練習できたのだが、私は悔しかった。改めて、教科書通りの英語だけでは足りないのだということを感じ、日本に帰っても、忘れないようにしようと思った。

十五日目、この日は夜にさよならパーティーが行われた。私達は

タレントショーに出場し、ダンスを踊った。見ている人がどんな反応をしてくれるか心配だったが、子供達のアクロバティックな演出もあって、大盛り上がりだった。タレントショーでは、先生達が順位をつけるのだが、私達は一位になった。まさか一位になれるとは思っていなかったため、とても嬉しかった。子供達との思い出を作ることができて良かったと思った。タレントショー以外にも、ゲームをしたり晁華生から歌のプレゼントをしたりして、さよならパーティーはとても楽しかった。実はその日は、子供達に会える最後の時間だった。普通なら翌日の朝が最後の時間なのだが、子供達はパーティー終了後、おばあちゃんの家泊まる予定だったため、この時間が最後だった。もちろん私とペアの子は泣いてしまった。私達は、子供達は泣かないと思っていた。なぜなら、私達がステイした家族は、五年前から何十人も日本人留学生を受け入れている家族だったからである。しかし、エレナもユーウエンも一緒になって泣いてくれた。それだけの仲になれたことに、私は喜びを感じた。それに外国の子供で、これだけ仲良くなれた人は、今までいなかった。私は何度も何度も感謝の気持ちを伝えた後、ホストマザーと三人で家に帰った。その日の夜は、ホストマザーと一緒に最後の時間をゆっくりと過ごした。

次の日、私達はホストマザーとホストファミリーと別れ、ロンドン観光をした後、日本へ向けて出発した。

これが、私の英国語学研修だ。ここには書かなかったが、楽しかったことや感動したこと、ホストファミリーとの思い出などは山ほどある。ただ、痛感したことは、前にも書いたが、教科書の英語ができて、言葉としての英語がまだ使えないということだ。生きた英語を学ぶ機会は、あまりない。だが、今後言葉としての英語も使



えるようになりたいと強く思った。又、今回これだけ楽しくて充実した語学研修にできたのは、多くの人の協力があったの事だと思う。ニッキーをはじめとするイギリス人の先生やCWAのスタッフさん、そしてもちろん私達を受け入れてくれたホストファミリー達に感謝したいと思う。

ホストファミリーの家を最後に出発した日、ホストマザーとホストファザーは、「また遊びに来てね。いつでもウエルカムだよ。」と言ってくれた。大人になったら、いつかペアの子とまた一緒にあの家を訪れたいと思う。